

大学での哲学教育における二種類のアクティブ・ラーニングの導入

キーワード：ピア・ラーニング、アクティブ・ラーニング、インターネット、協働学習、大学での哲学教育

木村史人(立正大学)

近年、大学教育においてアクティブ・ラーニング(AL)の導入の必要性が唱えられている。ALの手法は多種多様であるが、管見では、その活動の方向性を方法論的に、教師と学生との関係性という観点、すなわち(1)教師⇄学習者であるのか、(2)学習者⇄学習者であるのかという観点と、そしてまたインターネットの使用の有無、すなわち(A)授業内外のALでインターネットを使用する、(B)ALを行う際、インターネットを使用しないという観点から、分けることができるように思われる。

本発表の目的は、第一に、主に第二言語教育において近年注目されている教育手法であるピア・ラーニング(学習者同士の協働活動)という手法を紹介し、大学における哲学教育におけるその効果を検証することである。第二に、授業内外でインターネットを用いた授業案を提案し、その効果を検証することである。第三に、両者を比較し、それぞれの有効性を分析することである。

本発表では、以上の検証を行う授業の実践例として、発表者が現在行っている「倫理学とは何かAB」という授業での試みを紹介し、その比較を行いたい。現在、「倫理学とは何か」はAクラス(150名ほど)、Bクラス(70名ほど)の二クラスに分かれている。Aクラスでは、Webclassというインターネット設備を活かし、広義の意味でのALは行っているが、学生同士の対話活動は行っていない。それゆえ、上述の区分では、【1-A】に位置づけられる。それに対して、Bクラスでは、インターネットは極力用いず、授業内で学習者同士が対話を行い、理解を深めるといった活動を行っている。それゆえ、【2-B】に位置づけられる。

両クラスとも、ただ教師の講義を聞くだけではないという意味で、ALを導入した授業といえるが、Aクラスでは学習者同士が対面することなく、意見の表出・共有がなされるのに対して、Bクラスでは学習者同士の対面的な対話をとおして、意見の表出・共有がなされる。Bクラスでは、意見の表出・共有がなされる過程で、意見の齟齬を議論によってすり合わせる事が起こると予想される。この過程は、理解を深め、新たな発見に導くものとして学習者からポジティブに評価されうるかもしれない一方で、不必要な軋轢としてネガティブに評価されうる可能性がある。

本発表では、二つのクラスで満足度や理解度にどのような差が出るのか、あるいは出ないのかを授業内アンケートや試験結果から考察したい。この考察を踏まえることで、ALといっても対照的な2つの手法、すなわち学習者同士の対面的な対話活動を重視するBクラス【2-B】の手法と、インターネットを使用することで非対面的な思考活動を重視するAクラス【1-A】の手法とが、それぞれどのような有効性を有するのかを検討したい。

(きむら・ふみと)

福州大学(中国・福建省)での日本語教師の経験を経て、現在立正大学文学部哲学科に在職中。専門はハイデガーやアーレント、ヨナスなどの研究ですが、立正大学にてピア・ラーニングを取り入れた授業や、哲学カフェ(Ris 哲)を試みています。